

たはら 歴史探訪 クラブ 其の82

TAHARA
History Inquiry
Club

まぼろしの古窯、渥美焼 1

皆さんは「渥美窯」「渥美焼」という言葉は聞いたことはありませんか？ 歴史に興味のある方や焼きもの好きの方には、すでにおなじみの言葉です。ところが、このようにその名が知られるようになったのは、実はここ40年ぐらいの話でした。

平安から室町時代にかけての古い焼き物は、陶磁器研究家の小山富士夫氏が名付けた六古窯、すなわち、瀬戸焼・常滑焼・越前焼・信楽焼・



『渥美郡史』(大正12年刊)に紹介された「黒い壺」(中央)

丹波焼・備前焼が有名で、古美術の愛好家を中心に知られていました。しかし、研究が進むにつれて、これらに属さない不思議な焼き物があることが知られるようになったのでした。その不思議な焼き物を「黒い壺」と呼んでいました。壺にある蓮弁文・袷袷文と呼ばれる文様と、黒っぽい色をしている独特の特徴、産地が不明であるというなぞめいた点をからませて名付けたものです。

ある日、その産地が「渥美半島では？」という推定がなされました。『渥美郡史』に記載されている大正時代に発掘された加治町・坪沢古窯

の出土品に、それらしいものがあることがわかったからです。それを証明すべく発見を目指した結果、かつての加治農協の天井裏にしまっていた20数個の壺の中から、ついに「黒い壺」を発見したのでした。昭和38年のことでした。

これは、生産地が不明の一連の「黒い壺」の産地が渥美半島だったと証明されたと同時に、「まぼろしの窯」が、世に出た出来事でもありました。

このように、渥美窯のデビューは実にドラマティックだったわけですが、その後も日本の焼き物の歴史を変えるような、すばらしい発見や発掘が行われました。こうして渥美窯は、六古窯を超える窯、日本を代表する窯として、認知されるようになったのです。(増山)



まぼろしの「黒い壺」が発見されたときの様子

おしらせ

『渥美半島の考古学』

12月1日(日)から、田原市で出土した旧石器時代からの渥美古窯の考古資料を、赤羽根文化会館で展示しています。本文で紹介している渥美窯が世に出るきっかけとなった「黒い壺」も展示中です。ぜひご覧ください。

文化財課(華山会館2階)

23局3531 FAX 22局3811